

農業技術情報

令和3年8月1日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の状況（池田町 8月1日）（ ）内は平年値、斜体は前年値

作物名	遅速日数	生育状況		生育状況 農作業状況
秋まき小麦	±0	稈長 74.4(74.4)cm 穂長 9.0(8.9)cm	穂数 864(662)本/m ²	成熟期 7/22(7/22) 収穫期 7/27(7/28)
馬鈴しょ(メークイン)	+5	茎長 77.5(84.8)cm		終花期 7/19(7/23)
馬鈴しょ(男爵)	-	茎長 53.3(61.5)cm		終花期 7/17(7/20)
てん菜(移植)	+4	草丈 57.2(57.8)cm 葉数 28.1(24.0)枚	根周 29.9(28.8)cm	
てん菜(直播)	+2	草丈 54.6(55.0)cm 葉数 19.1(21.7)枚	根周 23.8(23.1)cm	
大豆	+4	草丈 59.4(66.6)cm 葉数 9.0(9.3)枚		開花始 7/16(7/19) 開花期 7/18(7/21)
小豆	-1	草丈 32.8(31.9)cm 葉数 9.0(8.0)枚		開花始 7/27(7/26) 開花期 7/29(7/28)
菜豆 (大正金時)	+3	草丈 42.5(46.7)cm 葉数 3.7(4.2)枚	着莢数 79.7(79.0)個/m ²	開花期 7/13(7/15)
菜豆(福勝)	-	草丈 55.1(56.9)cm 葉数 4.1(4.0)枚	着莢数 84.7(41.3)個/m ²	開花期 7/13(-)
菜豆(手亡)	+3	草丈 66.6(49.0)cm 葉数 7.5(7.3)枚	着莢数 109.4(63.8)個/m ²	開花始 7/16(7/17) 開花期 7/18(7/20)
牧草	+1	草丈 62.1(58.1)cm		
サイレージ用 とうもろこし	+4	草丈 276.7(263.6)cm 出葉数 16.8(16.1)枚		雄穂抽出期 7/25(7/29) 雌穂抽出期 7/27(7/31)
直播たまねぎ	-	草丈 67.9(-)cm 生葉数 7.9(-)枚 葉鞘茎 16.6(-)mm 球径 57.6(-)mm		

1 秋まき小麦

成熟期はほぼ平年並で、収穫は好天に恵まれ順調に進んでいます。

〈収穫後のほ場管理〉

(1) 麦稈の処理

- ① 収穫後の麦稈は速やかに搬出し、堆肥化に努めましょう。
- ② 特に条斑病や立枯病などの土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出して堆肥化しましょう。また、2～3年は麦の作付けを避けましょう。
- ③ 後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素流亡による環境負荷を低減するため、麦稈すき込み時の窒素肥料の施用は避けましょう。

(2) 多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ(コヌカグサ)・ギシギシなど多年生雑草の生えた小麦畑が散見されます。多年生雑草対策は耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上に再生 → 除草剤散布 → 耕起

表 1 耕起前の除草剤例

薬剤名	処理方法・使用時期	薬量(/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前（雑草生育期） （水量 25～100ℓ）	200～500mℓ	3 回	<ul style="list-style-type: none"> ・多年生イネ科雑草が 15cm 以上再生してから散布。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後 6 時間は降雨がない日に散布。（ラウンドアップマックスロードは1時間、タッチダウン iQ は3時間）
タッチダウンiQ	〈一年生雑草〉 耕起前（雑草生育期）	200～500mℓ	1 回	
	〈多年生イネ科雑草〉 耕起3日以前（雑草生育期）	500～1000mℓ		
クサトリキング	〈多年生イネ科雑草〉 耕起前まで （雑草生育期草丈 30cm 以下）	250～1,000 mℓ	3 回	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺作物に飛散しないように注意するとともに、ドリフト低減ノズルの使用が望ましい。 ・少水量散布は専用ノズルを使用。
	〈多年生雑草〉 耕起 7 日前まで （雑草生育期草丈 30cm 以下）	500～1,000mℓ		

(3) 収穫跡地における、後作緑肥の作付け

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種は、ばれいしょのそうか病軽減効果もあり、「ヘイオーツ」では小豆落葉病の抑制効果も知られています。表 2 を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み 時 期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦	8月上～ 中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月中旬～ 10月下旬
えん麦野生種 (ヘイオーツ、サイヤー)		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類（キカラシ） ※注1、2	8月上～ 下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり（りん蔵） ※注2	8月上～ 下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※注1 ・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※注2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

2 ばれいしょ

終花期は平年比+4日で迎えました。その後、高温が続き8月1日現在では、生育は5日進んでいます。本年は高温少雨の影響で倒伏しているほ場も見られます。

降雨があり気温が下がると、疫病の危険もあるので、発生に注意し防除に努めましょう。

(1) 疫病の防除

表3 疫病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	総使用 回数 (以内)	成分 (系統名)	浸透 移行性	効果の 発現	疫病以外の対象 病害(倍)	
							夏疫病	塊茎 腐敗
ランマン フロアブル	1,000～ 2,000	7日	4回	シアゾファミド (Qil)	浸達性※ のみ	予防	—	1,500
レーバス フロアブル	1,500～ 2,000	7日	2回	マンジプロパミド (CAA)	浸達性 のみ	予防 治療	—	1,500

※ 有効成分が葉の表面から裏面へしみ込む作用のことで、植物体内を移動しない。

(2) アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

ほ場をよく観察し、害虫の発生状況、収穫前日数を考慮して防除を検討してください。特に林地や防風林近くでの多発に注意してください。

表4 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分 (系統名)	対象害虫	
					アブラムシ類※	オオニジュウヤ ホシテントウ
アドマイヤー 顆粒水和剤	5,000～ 15,000	14日	2回	イミダクロプリド (ネオニコチノイド)	◎ (ジャガ モモ/ワタ)	◎ 15,000倍
コルト顆粒水和剤	4,000～ 8,000	前日	3回	ピリフルキナゾン (ピリフルキナゾン)	◎ (ジャガ モモ/ワタ)	

※ジャガ: ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ: モモアカアブラムシ、ワタ: ワタアブラムシ

※◎は登録があり、かつ道ガイドに掲載されていることを表す。

(3) 茎葉枯凋処理

① 薬剤による処理方法

茎葉枯凋剤の散布は、塊茎が目標の大きさに達した時期に晴天無風の日を選んで散布してください。

表5 茎葉枯凋処理剤

薬剤名	使用量 (ml/10a)	水量 (L/10a)	使用時期	使用回数 (以内)
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～ 収穫3日前まで	2回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後2～3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※土壌が極端に乾燥しているときは、水分ストレスにより維管束褐変を生じやすくなるため使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意する。

② リーフチョッパーによる方法

リーフチョッパーを使用する場合は以下の事に注意してください。

- ・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に行う。
- ・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
- ・機械後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認してから作業する。

3 豆 類

小豆は高温少雨の影響で開花が遅れ、遅速は－1日となっています。大豆は＋4日と進んでおり、大正金時は＋3日、手亡も＋3日と進んでいます。

菜豆類、特に手亡では過繁茂傾向の畑も見られるので、菌核病、灰色かび病の発生に注意しましょう。

(1) 菌核病の防除（大豆）

開花始後 10～15 日目（R3 池田作況平均で 7/26～7/31 頃）に第 1 回散布をし、2 回目以降は発生状況に応じて 10 日毎に防除しましょう。

表 6 大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分 (系統名)	備考
トップジンM水和剤	700～ 1,000	14 日	4 回	チオファネートメチル (MBC)	
スミレックス水和剤	1,000～ 2,000	21 日	4 回	フロシドン (ジカルボキシイミド)	
ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	7 日	3 回	ピリベンカルブ (QoI)	紫斑病に 2,000 ～4,000 倍で登 録あり

(2) マメシクイガの防除（大豆）

マメシクイガは莢伸長始（およそ半分の株に 2～3 cm の莢が認められた日）になってから、5～7 日程度で莢へ産卵を始めます。産卵の最盛期から 7～10 日間隔で 2 回程度防除しましょう。甲虫類の食害が目立つ場合は、有機リン剤（スミチオン乳剤）を使用しましょう。

表 7 マメシクイガの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分 (系統名)	備考
ゲットアウトWDG	3,000	7 日	3 回	シペルメリン (ピレスロイド)	アブラムシ類に 登録あり
スミチオン乳剤	1,000～1,500	21 日	4 回	MEP (有機リン)	カメムシ類に 登録あり
プレバソンフロアブル5	4,000	7 日	2 回	クロトラネリプロール (ジアト)	

(3) ベと病の防除（大豆）

「いわいくろ」でまだ防除を行っていない場合は実施しましょう。

表 8 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分 (分類名)
プロポーズ顆粒水和剤	1,000	21 日	2 回	CAA、TPN
フェスティバルC水和剤	600	7 日	3 回	CAA、無機銅

※「フェスティバルC水和剤」は「トップジンM水和剤」との同時使用不可。

(4) 炭そ病の防除（小豆）

高温乾燥条件で発生は少なめですが、ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう。

表9 小豆「炭そ病」の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分 (系統名)	備考
トップジンM水和剤	1,000	14日	4回	チオファメートメチル (MBC)	※チオファメートメチルを含む他剤との総使用回数(4回)に注意する。

(5) 灰色かび病・菌核病の防除（小豆・菜豆）

灰色かび病・菌核病の防除時期を迎えています。ほ場の状況に合わせて、適期防除に努めてください。☆（）内はR3池田作況平均の場合

◎ 小豆防除適期

1回目：開花始後7～10日目（8/3～6）

2回目：1回目防除の10日後（8/13～8/16）

◎ 菜豆防除適期

2回目：1回目防除の10日後（7/28～30）

表10 灰色かび病、菌核病を中心とした防除例（小豆・菜豆）

回数	薬剤名	成分 (系統名)	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病に 対する効果
1回目	オルフィンフロアブル	フルオピラム (SDHI)	2,000	7日	3回	—
2回目	ブロードワン顆粒水和剤	チオファネートメチル・メパニピリム (MBC・AP)	800～ 1,000	14日	4回	○
	プライア水和剤	ジエトフェンカルブ・ベノミル (N-フェニルカーバメート・MBC)	1,000	14日	4回	○
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ (QoI)	2,000	7日	3回	○

※ブロードワン顆粒水和剤はチオファネートメチルを含むので、他剤との総使用回数(4回)に注意する。

☆その他登録薬剤については「7/15付技術情報」や「令和3年度農作物病害虫防除基準」参照

(6) アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除（小豆）

茎葉にアブラムシの寄生が散見されます。ほ場を観察して寄生が確認されたら防除しましょう。アズキノメイガは開花始の7～10日後に薬剤散布を行ってください。

表 1 1 アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例 (小豆)

薬剤名	成分 (系統名)	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	アブラ ムシ類	アズキノ メイガ	ナミ ハダニ
アドマイヤー 顆粒水和剤	イダクフロリド (ネオニコチノイド)	10,000	30 日	2 回	○	-	-
モスピラン SL液剤	アセタムプリド (ネオニコチノイド)	4,000	14 日	3 回	○	-	-
ウララDF	同翅目摂食阻害剤	4,000	7 日	2 回	○		
ゲットアウトWDG	シハルトリリン (ピレスロイド)	3,000	7 日	3 回	○	○	-
ペイオフME液剤	フルトリネート (ピレスロイド)	2,000	7 日	3 回	○	○	-
スミチオン乳剤	MEP (有機リン)	1,000	21 日	4 回	○	○	-
ダニトロン フロアブル	フェンピロキシメト (METI)	1,000~ 2,000	7 日	1 回	-	-	○

4 てんさい

移植てんさいの生育は平年比+4日、直播栽培は+2日と進んでいます。

褐斑病の発生は現時点では見られていませんが、ほ場をよく観察し、適切な防除を実施してください。

表 1 2 褐斑病・葉腐病・アブラムシ類の防除例

防除 時期	対象病害虫	薬剤名	成分 (系統名)	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
8月 月上旬	褐斑病 (3回目)	グリーンダイセンM 水和剤 ※	マンゼブ (ジチオカーバメート)	500	21 日前	5 回
	葉腐病	モンカット フロアブル 40	フルトラニル (SDHI)	1,000	14 日前	4 回
	アブラムシ類 カメノコハムシ	ダントツ水溶剤	クロチアニジン (ネオニコチノイド)	2,000 ~4,000	14 日前	3 回

※マンゼブを含む剤の総使用回数 (5回) に注意する。

ほのぼの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。

～農薬の安全使用と農作業事故防止に努めましょう～

- ★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかりと覆うようにしましょう。
散布が終わったら、肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。